

安野光雅 追悼「洛中洛外と京都御苑の花」展

大阪高島屋 2021. 08. 25～09. 06 横浜高島屋 2021. 09. 15～10. 04



「安野光雅」(1926～2020)は1968年に絵本作家としてデビューし、ユーモアあふれる絵本や暖かな色彩の水彩画などで人気を集めた画家で本展は94歳で逝去するまで描き続けた作品原画を一堂に鑑賞できる「追悼展」である。

「洛中洛外」は、画伯自身が京都各地を訪れ、洛中のおなじみの寺社仏閣だけでなく、洛外も京都の北部から南部までの広範囲にわたる風景や歴史ある町並みを描いたもので、2011年5月から産経新聞に毎月連載された水彩画の作品である。

本展は、京都ゆかりの人物まで描かれて、題材は多岐にわたるもので、約9年間にわたり京都を題材とした作品「95点」と京都御苑の多くの花を描いた“優しい水彩で描かれた京都の四季の原画”作品「26点」が展示されている。

《錦市場》



錦市場には京野菜の専門店がある。ナスでもタケノコでも他とはちがう。さすが錦で、長い山芋でもなく、グローブのような山芋でもなく、なんだか特別な丸い塊の”大和芋”を見つけた。

都合3個見つけて買ったが、東京では見たことがない。食べてみたら、やはりおいしかった。

《法輪寺》



春の嵐山はさわやかであった。桂川左岸へ出たとたん青い山並みと桜、銀色の川面が目の前に広がっていた。目の前に、嵐山中腹に建つ名刹である法臨寺の屋根が見えた。「ここから描こう」と椅子を取りだしたのは、有名な渡月からずいぶん下流の変哲もない土手の上である。

《哲学の道》



京都の「哲学の道」は、若い時に哲学に縁のない人間が絵を描きに訪れたドイツのハイデルベルグの哲学者の道にちなんだものであるとされている。この作品は、道を踏み分けて林の小道へ入ったところで描いたものである